

## 「生涯教育」の最初の提唱者

# ラングラン氏との対話

鳴門教育大学 伴恒信

対話での質問者伴恒信（鳴門教育大学）は、1983年から84年までユネスコ職員としてドイツ連邦共和国ハンブルク市にあるユネスコ教育研究所に勤務し、生涯教育に係る種々の国際会議の主催、プロジェクトの運営等に携わってきた。ユネスコ内部に籍を置いた者から見ると、近年ユネスコの生涯教育に関して日本人の研究者が書いた論文には、ユネスコの実情も分からないままに、日本人の先行論文の受け売りや誤謬に満ちた解釈・評価を述べているものが多く見受けられる。そこで、1994年に文部省長期在外研究員としてアメリカのニューヨーク州立大学へ欧州経由で赴く途上、パリのユネスコ本部で生涯教育の概念を世界で初めて提唱したポール・ラングラン氏に面会して、本人の口からジェルピ氏に対する評価、生涯教育の概念の発想に至った経緯などを語ってもらった。ラングラン氏との対話以降、伴の方は、「子どもの道徳的社会化に関する日米比較調査研究」、「価値教育に関する環太平洋諸国国際共同研究」等の実施や取りまとめに精力を傾注していたため、録音テープから英語の対話を掘り起こし、翻訳する煩雑な作業になかなか時間を取れず、今日に至ってしまった。ただ、多少時間は経っても対話内容の歴史的事実としての価値は変わらない故、ここに『生涯フォーラム』の紙面を借りて公表させていただくことにしたのである。

伴…大変不躓とは存じますが、私  
がこれまで疑問に思い、直接お尋  
ねしたいと思っていたこと、つま  
り、あなたとジェルピ氏との関係  
について単刀直入にお尋ねします。  
最近日本でユネスコの生涯教育に  
ついて書かれている論文を見ます  
と、あなたとジェルピ氏の生涯教

育に関する考え方が紹介され、あ  
なたが生涯教育の理念を提唱され  
ジェルピ氏が真の意味でユネスコ  
における生涯教育の概念を展開し  
完成させたというような論述が目  
立ちます。私自身が1983年か  
ら84年までユネスコ職員として働  
いていた時の風聞では、丁度アメ

リカがユネスコの「政治化」を非難して脱退した時でもありませんので、ジェルピ氏の極めてラディカルなイデオロギー的主張に対し、ユネスコ本部側も困惑していたというのを聞いています。実際ジェルピ氏のユネスコでのポジションも、生涯教育のプログラムとは関係のない、人事部のあまり権限のない地位にあったように思えます。あなたご自身は、彼の生涯教育の見解に対しどう思われていますか。

ラングラン…彼の生涯教育に関する見解は、私の見解を受け継ぐものではないかもしれませんし、成功裡に発展させたものとも言えません。

伴…どんな点で受け継ぐものと言えないのですか。

ラングラン…ジェルピはとても素晴らしい人です。しかし、私の論述のやり方というかスタイルとは違います。私は彼のようなエコノミストではありません。

伴…そうですね、特に、どういったスタイルにおいて違うと、あなたはお考えですか。

ラングラン…それはつまり、生涯教育そのものよりも、ヨ

# 生涯教育は可能性の実現

きましよう。フランスでは、多くの人達にとって生涯教育はたいしたものではないのです。

ロッパの国と第3世界との間の関係に関心をもっています。私の言っていること分かりますね。

伴…ええ。

ラングラン…彼はとても素晴らしい人で行動力もありますが、彼が私と同じ路線を歩いているとは思いません。

伴…そうですね。

ラングラン…私はジェルピとは昔からの知り合いです。彼は素晴らしい人で行動力があり、自分していることに熱心に取り組んでいます。でも私たちは全然違うことをしています。というのも、ジェルピは生涯教育に政治的アプローチや経済的なアプローチを行って理解しようとしています。彼は、

生涯教育とは第3世界の人々のためにこそ存在していると言っています。彼はそういった人々を、もともと第3世界に生まれ生活する、内生する人々(indigenous people)と呼んでいます。実際、そういった人々はある程度までは関心を示すと思いますが、この生涯教育の考え方を一部の世界に限って用い

ラングラン氏と筆者 1994年、パリにて



ることは、良いことではありませんが、それが全ての人達を対象とするということであれば良いものでしょう。この考え方には、実際に教育のプロセスのことも含まれてきます。ところが皮肉なことに、彼は教育のプロセスについてあまり関心がないのです。彼は問題を解決するにあたって、全く哲

学的に思考することができません。

私の考えでは、この生涯教育の概念は、根本的に教育の問題への哲学的かつ道徳的アプローチであると思っています。わかりますか。ひとつの成長しつつあるパソナリティーの問題なのです。このパソナリティーの問題は世界のどこでも同じでしょう。勿論彼の主張する工場で働く労働者の問題にも関わってくるでしょう。まあ、大事なことは生涯教育を教育の基本的なプロセスであると見なすことだと思えます。その点でも、私はジェルピがこの線に沿って論理展開をしているとは思いません。まあ、それはそれでかまいませんが、彼には彼のしたいことをしてほしいと思います。しかし、それは私の思想を受け継ぐものではありません。

同じことがフランスでの多くの人達についても言えるといってお

あなたが生涯教育の話をすれば、

たいいていそれは職業教育についての話だと受け取られてしまいます。人々は、職場での地位だとか経済的な地位についての知識を教える為にできることは何でもしますが、それは非常に限られた狭い意味での教育についての考え方です。そういうわけで、フランスでは、生涯教育を子どもから青年、成人、老人、働いている人もいない人も、全ての人々に関わる普遍的な問題であると、それが教育の全体的なプロセスであると、そう考える人はほとんどいません。人はなにものかになつていく。生成(Devenir)の問題なのです。人が如何に世の中のあらゆる経験をし、世界と出会い、世界の人と出会い、如何に今ある存在以上のものになるのか、つまりどのようにしてその人の潜在しているものを実現していくのか。実際、人は可能性を実現しているのです。私はこの点でも、ジェルピが生涯教育の

概念を本当に理解しているとは思えません。

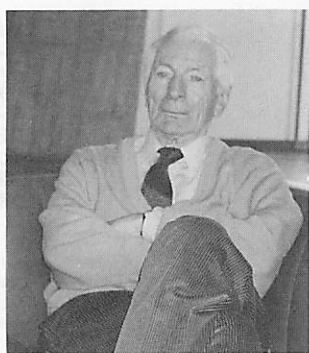
伴…日本では、一部の左派グループ研究者のジェルピ理解とは反対に、あなたの今話して下さった生涯教育の終極目的が自己実現であるといった考えが、一般の人々に受け入れられた考えになっていきます。つまりは、人々はあなたの生涯教育論を共通の概念として受け止めているわけです。

ラングラン…日本の人々はとても先進的だと思えますし、それは私の考えているところのものです。様々な人達を書いていたと思いますが、こういう受け止め方がなされるべきだと思います。教育についての一般的な問題は決して特別なものではないのです。何歳になつたら人々が自分たちの経済状況と学歴を改良できるのでしょうか。これら全てが重要なことではありませんが、それは生涯教育の考え方はありません。

伴…しかし、フランスでは近年の経済危機、あるいは経済状況の悪化のために人々は職を得ることができません。それで人々

は生涯教育を職業教育のことだと考えがちなのです。

ラングラン…ええ、生涯教育、成人教育、労働者教育、全部が同じ一つのかごの中に入れられてしまっています。全部一緒です。私たちがしていることは、人々の職業能力を向上させ、良い仕事を得るための機会を獲得させ、良い仕事に就かせ、彼らの仕事を発展させることなのです。それで人々はそう考えてしまうのです、フランスではほとんどそうなのです。私と同じ考えなのは、本当に少数です。なぜでしょう。アメリカでも、人々はわかつているでしょう。ほとんどの人達が、生涯教育は職業の問



ラングラン氏

題ではなくて、人生の一般的な問題だと捉えています。だからあなたはこれからニューヨークの人達に会いにいかうとされているのでしょう。彼らはあなたの来訪を望んだのです。

伴…私の方からニューヨーク行きを希望したのですが…。(筆者注…この時、筆者はニューヨーク州立大学に客員研究員として渡米する途上であった。)

ラングラン…しかし、例えばイギリスではどうでしょうか。彼らも、生涯教育を何か重要なものとは考えていません。彼らにとって生涯教育は成人教育の別の呼び方になります。

伴…そうですね、彼らは普通生涯教育という成人教育のことを考えますね。

ラングラン…あなたがイギリスでイギリスの人達と生涯教育についての話をするとしたら、たいてい彼らはこう言いますよ、「なぜ生涯教育なんて概念を作り出したん

ですか、私達には一般に知られた成人教育があります、私達にはそれで十分です。」とね。

伴…確かに保守的なイギリスの人々が言いそうなことです。しかし、たぶん生涯教育の本当の意味を知らないから成人教育と混同しているのでしょう。

ラングラン…そうですね、それらは同じものではありません。多くのアングロサクソン系の国では生涯教育の本当の意味を理解しなかった。彼らは成人教育と同じものだと思っている。まったく混同している！彼らの新聞に生涯教育のことが載っても、それは私達の考える生涯教育のことを言っているのではないのです。彼らはいつても成人教育のことを言っている。おそらく、きっと、イギリスでは歴史のある成人教育について誇りを持っているでしょう。彼らはいつも、いつだって成人教育の話なんです。

伴…それで、あなたから生涯教育の本当の意味を啓蒙しつづける必要があるのです。

ラングラン…そうですね、

# 教育は全ての場で行われる

それは戦いを意味しています。戦いは終わっていません。私達は未だ戦っているのです。

伴…そうですね。でも、成人教育も生涯教育の一部と考えれば、彼らの誤解は誤解で認めて、敢えて戦うとまで言われる必要はないのではないのでしょうか。

ラングラン…全ての教育が変わらなければならぬと考えるべきです。わかりますね。50カ国でそれを目指しているのですよ。

若者達は自分たちの受けている教育に満足していません。なぜならそれが自分自身のやりたいことと一致していないからです。今、各国及び各種の機関の長たる者達は何かを変えようと努力しています、例えば学歴資格を変えるとか、教育の方法を変えるとか。しかし彼らは肝心の教育の本質を変えてはいません。教育とは、何かこう、もつと全生涯にかかわっていくものの、人生の全ての場面で行われるものです。それは学校での教育だけでなく、家庭での教育でもあるのです。教育は全ての場であるのです。わかりますね。それがまさに生涯教育の概念です。それ

は人生全体というだけでなく、人生のあらゆる局面でも行われるものです。

伴…あなたのおっしゃっていることは非常によくわかります。しかしそれでもなお何人かの人達は実態としての成人教育と生涯教育との違いをそう明確に区別できないでしょう。

ラングラン…その通りです。

伴…それで次に問題になるのは、学校教育と生涯教育との関係です。成人教育も実際には大学やホッホシュールなど何らかの学校という場において行われています。

ラングラン…多くの人の人にとっては、教育は学校で行われるものです。成人教育は学校教育のあとにある、つまり学校なのです。つまり成人教育ではなくて、人生が学校なのです。教育は学校についてくるものなのです。学校が教育なのです。ほとんどの人は、教育が人生の様々な場面で受けるありとあらゆる種類のものだということを理解していません。例えば誰でもが教育者になりうるのです。父親も教育者であり、母親も教育者であり、母は女性である関係で、男の

人も教育者であり、女の人も男の人の教育者なのです。それが教育の全般的な概念です。そう、全てのもので。私達は発展させていかなければなりません。いかなる環境も、いかなる状況も、いかなる可能性も、いかなる人々も教育のために有効なものとなりうるのです。

伴…それではフランスの教育の状況をさらに言って、まずもって変わらなければならない最も重要なことといたら何でしょうか。

ラングラン…フランスで、ですか。伴…ええ、例えばの話ですが。フランスは、あなたがとてもよく分か

かってらして、その必要性を最も感じておられるだけに、具体的に挙げやすいのではないのでしょうか。ラングラン…変化はフランスではほとんどありませんでしたし、これからも少ないでしょう。つまり、フランスでは成人教育が一般的でした。いつの時代も何かしら国粋主義的な、君主制的な伝統が付きまといっていました。というの、19世紀には成人教育は一種の政治的なリアクションでした。労働者の教育は、よりよい社会、よりよ

い政治的文化を作るためのものにした。しかし、今や成人教育はちよつと違ったものだとわかって来てはいますが、それでも職業と関連したもので、生涯教育の概念とも関連するものではありません。そう、変化は何もないのです。成人教育に関係している人達はほとんど、成人教育が、よりよい転機よりよい仕事、仕事を得るための何か大きな条件のようなもの思っています。そういうことですから、この生涯教育の概念を、職業教育をする全ての教育者達が理解するようにしていかなければならないのです。

伴…そしてフランスには、他の欧米諸国には見られない中央集権型の教育システムがありますね。おそらく中央集権の教育構造が伝統志向の教育風土を醸し出しているのではないのでしょうか。

## 優れた教育者は 伝統を変えて行く

ラングラン…私達の教育システムは中央集権化しています。教育界には合わせて約80万人の教師や大



学の教授がいます、教職に80万人、80万人ですよ！これらの人達は伝統に従ってやっています。

伴… 伝統にね！彼らは変わりたくないのです。彼らは、教育とは人々やその生活が良くなるもの、より良く発展させるためのものと思っ  
ています。でも実際はそうではあり  
りません。そうでしょう。素晴らし  
しい教育者とは伝統を変えていく  
ものです。

私達の教育システムが中央集権  
化しているとあなたは言いました  
が、そういった中央集権のシステ  
ムに係わって働いている人達は一  
万人程度なのです、そして残りの  
教職にある人達は伝統に従って  
いるだけなのです。

伴… 日本でも同じような中央集権  
化した教育のシステムがあります  
が、それでも人々はあなたの考え  
方をとっても重要なことと受け取っ  
ています。そう、中曽根内閣の下  
に設置された国を挙げての教育改  
革検討の審議会、中央教育審議会  
でも21世紀の日本の教育の方向は、  
生涯学習体制への移行と、はつき  
り生涯教育の重要性を理解してい  
ます。

ラングラン… わかりました、そう  
いうことだから私は日本でどんな  
ことが起きているのかとても気に  
なっていたのですね。何か違うこ  
とが起きているんですね。私達に  
とっては伝統こそが力を持っている  
のですけれど。

伴… そうですね、私達の教育界に  
も伝統と言えるものがあって、敢  
えて一言で言えば日本では儒教の  
影響に基づく伝統的な考え方があ  
ります。

ラングラン… あなた達の宗教は生涯教育の  
概念に近いものです。それは禅で  
すね。

伴… そうです、私達日本人にとっ  
て禅や儒教的な見地からみると、  
生涯を通じて自分自身を高めてい  
くことはとても大事なことなので  
す。確かにご指摘の通りです。

ラングラン… そうです、宗教的な  
要素もとても重要です。わかりま  
すね。例えば、北欧の国、スウェ  
ーデンやノルウェーでは、プロテ  
スタントなのです。プロテスタ  
ントの人達はとても責任感が強い  
です。彼らは自分のことは責任を  
持つて考え、責任を持つて決めま

す。ラテン系の国々やカソリック  
系のところでは、どうして教育が  
力を持っているのでしょうか。そ  
の理由は、人々が他の人に言われ  
たことに従うのに慣れているから  
なのです。

伴… 本当ですか。

ラングラン… ええ、本当ですよ！  
あなたはそういうた力のことを理  
解していかなければなりませんよ、  
実際に人々を自ら高めていく一つ  
の方法としてそういうた力を学ん  
でおくべきです。これはとても重  
要な要素です、宗教的な要素とい  
うのはね。それに、あともう1世  
紀もしたら変わっていくでしょう。

1世紀の間にくつかのことは良  
くなってきました。真実を知って  
いるのは警察で、警察こそが、何  
が正しくて何が悪いのか、あなた  
のすべきことは何なのか、わか  
っていたのです。あなたは警察の  
言うことに従わなければならない  
のですよ、その警察は司教の教え  
に従わなければならない、その  
司教は法王の教えに従わなければ  
ならなかったのです。わかります  
ね。

## まさに良心が 生涯教育の羅針盤

伴… 伝統に縛られ、人間はそんな  
に変わりにくいものではないか。  
ラングラン… 変わるのには時間か  
かります。自分自身で学び身に  
つけたものが本物の良心なのです。  
全ての良心は生きていく上での指  
針になってくれるでしょう。

伴… まさに良心が生涯教育の羅針  
盤ということですか。  
ラングラン… それが根本なのです。  
つまり生涯教育はそのためにある  
のです。わかりますね、自分たち  
の良心に照らして、何をしなければ  
ならないのか、何を考え、何を  
すべきか決めなければならぬの  
です。自分自身のマスターになら  
なければならぬのです。

伴… ええ、あなたがおっしゃるよ  
うに、それが考えていかなければ  
ならない点です。私も生涯教育の  
研究をしていくうちに、結局良心  
や道徳の問題に行き着きました。  
ラングラン… それが考えていかな  
ければならない点、そうですね、そ  
の通り。

伴… それでは、私が抱いているも

# 個性の生成発展は心も癒す

伴…そしてそれがあなたの教育観の基盤となったのですね。あなたがユネスコに

う一つの基本的な疑問についてお尋ねします。あなたは、何故に、そしてどのよ

うにして、生涯教育の考えに辿り着いたのですか。

ラングラン…わかりました。お話ししましょう。

伴…特にどういった経緯だったのか、興味あります。

ラングラン…その始まりははっきりしないのですが、つまり私が人生の中で様々な経験をしてきたからなのだと思います。私のスタートはリセ（筆者注…フランスの大学進学コースの高校、戦前は日本の旧制高等学校のように大学レベルの教授資格を要求された。）の教授、教師でした。私は学びながら、人生の10年間を教えて過ごしました。これが最初の私の教えるという活動の原点でした。そこで私はその仕事で人々に教えなければならぬこと、何をすべきなのかということがわかりました。というのにもたくさん理由があるのですが、まず、問題を持ち落ちこぼれていく子どもたちの生活にたくさん

の状況があることを知りました。

例えば、倫理的な、そして市民的な面での重要な問題など。

伴…それはとても重要な問題ですね。

ラングラン…私が教えていることは、彼らにとっては、ただ価値観や生活の側面を知識として受け取ることにはすぎないということがわかりました。それはただの知識の伝達にすぎませんでした。人に教えるということは彼らが自分で学び取るというものではなかったのです。そして私が教師でいた、25から35歳の間でしたが、私が人々にしようとしていたことの欠点に気づいたのです。結局、この考え方で、教えることがうまくいくということは、パーソナリティーを

発展させることではなく、ただ優秀な外交官になれるかどうかといったような可能性を作っただけでした。

伴…そうですね、私達日本人も一般に同じような姿勢で教育に携わっています。

ラングラン…結局、西欧のいうところの成功か失敗かが実際の教えることの意義であり、卒業証書を受け入れたり受け取ったりすることではない。そして、これが人々の違いを生み出すものであることに気づきました。それが私自身の考えでした。誰でも自分なりの方法で問題に立ち向かいます。問題に違いはありませんがこの関わり方にも色々な力が関与してきます。教育の機能は、始めは探求しようとする可能性を広げていくこととしてスタートしたものが、結局ただの答えの受け取りだったと気づきました。世界中の色々なことを知ろうと探求することではなく、ある問題に対してあらかじめできている答えを蓄積していくことだったのです。それは私はあまりしたくない。しかし、私が教師だったとき、教えることのプロであったときに、その欠点に気づいたのです。

ラングラン…ええ、それから戦争中、私は成人教育の担当者になったので教師としての職業から離れた。成人教育は取り上げられなくなるだろうと感じていました、というのもこの成人教育の概念はすたれてしまっていたからです。人々に、労働者達に、お百姓達などに、人生に起こるあらゆる経験に役立ついろいろな知識をアピールし、作り出そうとしました。それはよい訓練になりました、心のトレーニングにね。それが長い始まりでした。成人教育者としての後は、えーっと…私がどんなふうにして生涯教育の概念を発展させてきたかというところについてお尋ねでした。そう、一つの経験はマイナスに働きました。一つはプラスに働きました。というのは成人教育が労働者のためにあり、労働者と共に

あつたからです。

また、その間、私は長いことフランス文学の教師だったのですが、ドイツ文学などに興味を持ち、ロシア文学などにも触れました。そして、トルストイやディケンズ、あるいはバルザックといった人達が教えていることは、人生は非常に複雑なものだということ。それは成長しつづつあるパーソナリティナリテイはまた、心を癒してもいくのです。たとえば、トルストイの「戦争と平和」、ディケンズの「偏見」。それらは、人がどんなふう成長していくかを私達に教えてくれ、それからそれがきっかけとなって色々なものに興味を広げていく。まさに生成発展 (deveniri) です。ヘーゲルに出会ったことは、私にとってとても重要なことだと思います。ヘーゲルは人間が様々な段階を如何に成長していくかをあらかじめ説明しているからです。この考え方が生成発展 (deveniri) なんです、それが基本なんです。Deveniriとはあるものになっていくことを意味します。そ

れは成長についての重要な概念です。哲学との出会いを通して、子どもとの関わりの経験、成人教育者としての経験、文学との出会いなど、多かれ少なかれそうといったものを通して、私は生涯教育の概念を醸成させてきました。人に従うのではなく、普遍的な概念に従うことは世界中のどんな種類の教育にも有益なこととなるでしょう。そう、私は、様々な経験から、自身の意志で、多くのことを、色々な人達から学びました。いろいろな作品からも多くのことを学びました。文学でももしろいのはそこで起こる出来事ではなくて、その中にある生きざま、人々そのものなのです。

伴…そのあと、あなたはユネスコの職員になられましたね。それはいつでしたか。どんな契機であなたはユネスコに入られたのですか。ラングラン…私がいつユネスコに入ったかですか。私がユネスコに入ったのは…ええ、私はモントリ

オールの大学で教えていました。モントリオールの大学で私は文学部の教授として雇われました。そこで私はカナダへ行ったのです。ユネスコの設立はいつでしたかね。46年でしたか。

伴…46年です。ラングラン…46年ですか。ユネスコで成人教育の責任者である人が私の親しい友人なのです、カナダ人ですがね。カナダから戻ってきたとき、彼は49年の第一回国際会議のプログラムの準備をしていました。彼は私のアプローチが問題を解決できるだろうということを知っていましたので、私にユネスコに来て時々準備やお手伝いをしてほしいと頼みました。「プログラムの準備をするのに、私の手伝いをしに来て下さい」と、彼は言いました。それで私は行くことに決めました。私は6週間かそこらの契約をしました、そして6週間が終わると、彼は6ヶ月に延長したんです。私にユネスコにいてほし

かったのです。伴…それではあなたはこのユネスコ創設期からユネスコの専門員になったのですかね。

ラングラン…ええ、私はユネスコ創設の時にいました。その頃ユネスコはとても素晴らしい組織であり、私自身の考えを発表する良い機会でしたが、この生涯教育のプロセスの準備をすることはほとんどできなかった。当時は成人教育がとても重要だったのです。そしてユネスコが世界中に成人教育の概念の解説普及に取り組んでから、それに伴い色々な仕事が増え、世界で18カ国で仕事をしていました。

伴…18カ国ですか。ラングラン…18カ国です。1週間、あるいは1ヶ月の単位でカナダで仕事をしたり、イタリアに行ったり、たくさん国で働きました。私のいろいろな出会い、私の受けた教育、私自身の考え、それらを通して私は自分自身を成熟させて

いきました。そうして

# 18カ国の仕事で自分を熟成

私はこの生涯教育の概念を發展させてきました。私は1960年に

その考えをスタートさせました。  
伴…1960年ですね。

ラングラン…1960年、いくつ  
か記事があるでしょう。生涯教育  
が始まったのです。実際には19  
56年に教育のプロセスについて  
著述に取り組んで、小さな冊子を  
公にしました。そのあと、国際教  
育年は70年でしたか？  
伴…70年です。

ラングラン…70年ですね。ユネス  
コ教育局の局長が、局長ではな  
かったかな、…彼はとても紳的な  
人でした。彼とはほとんど話す機  
会がなかったのですが、彼が「そ  
の事（生涯教育）についてちょっ  
と書いて下さい」と言ったのです。  
それで私は「生涯教育入門」を書  
きました。この本はすぐにとても  
重要な著作として受け入れられま  
した。ユネスコの総会でこれがと  
ても良い本だと決められたのです。  
次の年には、それは17カ国語に翻  
訳されました。

伴…ええ、それはとても有名です。  
日本にも翻訳されたものが出版さ  
れています。（筆者注：『生涯教育  
入門』へ財全日本社会教育連合会  
刊）

ラングラン…日本との関わりで言  
えば、64年に成人教育者の集まり  
があったのですが、この会合に1  
人の日本人がいました。名前は覚  
えていませんが。

伴…おそらく波多野完治氏でしょ  
う。

ラングラン…そう、彼は日本人で  
した。64年に彼が日本へ戻った時  
彼はその生涯教育の本の事につい  
て語ったのでしよう。彼は私の生  
涯教育についての発表にとても関  
心をもっていました。『生涯教育入  
門』の公表の2、3年前にすでに  
準備はしてあったのです。64年  
にすでに考えは明確なものになっ  
ていましたから。しかし実際に書  
いたのは70年でした。そう、チャ  
ンスは国際教育年だったのです。  
その後は、もちろんどうなったか  
ご存知でしょう。

伴…ええ、もちろんです。世界で  
の生涯学習の推進にあなたは非常  
に素晴らしい貢献をなさいました。  
ところで、私は知りたいのですが  
：国際教育年の機会にフランスの  
元首相エドガー・フォールを委員  
長とする教育開発国際委員会が設  
置されました。あなたはその委員

会の事務局側の重要メンバーだっ  
たのではないか。

ラングラン…ええ、私はメンバ  
ーでした。私は事務局側でテクニカ  
ル・サポートを行う1人でした。  
結局、私がフォール報告書を書く  
責務にあったのです。

伴…やっぱりそうですか。実際に  
フォール報告書を中心になって書  
かれたのは、あなただったのです  
ね。

ラングラン…ええ確かに、実際の  
ところ私は、*Learning to Be*（フ  
ォール報告書）という本を書きま  
した。

伴…*Learning to Be*の基調には、  
生涯教育の考え方が流れています。  
ラングラン…*Learning to Be*、そ  
れからももちろん、生涯教育に関す  
る私自身の考えを発表し、それを  
やってみるいい機会を得ました。  
ハンブルグのユネスコ教育研究所  
ではいろいろな研究の機会があり  
ましたが、それらはとても貴重な  
ものでした。というのは、ハンブ  
ルグの研究所では教育に関する全  
ての問題点について取り組むチー  
ムがありました。私達はそれに取  
り組み、研究所やロンドンのペル

ガモン社でも本を出版しました。  
英語で出版された『生涯教育の基  
礎的学習領域』がその一つです。  
伴…私もハンブルグのユネスコ教  
育研究所で働いていましたから、  
多くの出版物が出版されているの  
は良く知っています。

ラングラン…それからもずっと多  
くの機会がありました。でも仕  
事としては：私は私の仕事を72年  
まではユネスコでの仕事として完  
成させてきました。*Learning to  
Be*などはその一つの結晶です。

伴…あなたがユネスコを去られた  
あとにも、おそらくいろんな国際  
会議にあなたが出席される機会も  
多かったのではないでしょう。か。  
ラングラン…ええ、私は日本にも  
行きましたよ。74年に、生涯教育  
についての国際会議がありました。  
トロントで設立された成人教育の  
研究機関からの招待で、本部はト  
ロントにあるのですが、成人教育  
の国際会議にも行きました。他に  
もいろいろやりましたね。私と私  
の妻は工場でも働いてきたんです  
よ。  
伴…何の工場でお仕事をされたの  
ですか？



ラングラン…そうですね、どんな種類の工場でも：金属の工場とか。まあ様々なところで、：2、3年の間ですが。私はちょうど私の生涯について著書を書いたところです。

伴…おや、あなたご自身でそれをお書きになったのですか、それとも誰かが…。

ラングラン…私が自分でそれを書いて、来週出版される予定です。

伴…来週ですか？

ラングラン…来週です。Le Metier de Vivreといます。どう英語に直したらいいかわからないのですが。

伴…それが出版されるのですね。ラングラン…人生がMetier(仕事)なのです。

（略）

伴…あなたは本当に大変エネルギーッシユな方で、生涯教育の分野でなお仕事をされています。だが、あなたの後継者がいらつしやらないのは非常に残念です。ジェルピは本当の後継者ではありませんね。ラングラン…誰も後継者といえる人は、今ユネスコにいません。残念なことだと言わざるを得ません。伴…あなたの後継者に誰がなりそうですね？

ラングラン…そうですね、問題は、ユネスコが一番力を入れていることとは、識字率を上げようとすることなのです。ユネスコの全ての財源は識字の問題につき込まれています。

伴…ええ、それは存じています。

ラングラン…それに彼らは成人教育をおろそかにし、生涯教育の概念を無視していました。ジェルピはこういった問題に熱狂的に取り組んでいたのです。しかし、方法論はあまりにもひどかった。伴…あなたの生涯教育の考えを回復させる方法がありますか。

ラングラン…私は自分のポケットから出しますよ。

伴…しかし：

ラングラン…しかし、事実として、学校に続くものがないのです、それはわかっています。結局、教育は可能性でしかありません。私達は色々な失敗を見てきました。教育は伝統なのです。彼らは人間の本当の問題に立ち向かうことはできません。伝統が教育なのです。その世代の人達は、現実の生活を送るのに利口ではない。人生の全てのものを利用すること、芸術的なものなど、そういうことがとても必要なのです。こういったことが全部おろそかにされている。生涯教育の精神なんて何もありません。どんな人もその事を考える必要があるのです。

伴…あなたは本当の生涯教育者な

のですね。もう何歳になられたか。

ラングラン…私はとても年寄りです。83歳です。

伴…83歳ですか、でもまだまだ世界中の多くの人達への影響力を持つておられます。

ラングラン…私は1人の老人です。ええ、あなたのような人にお会いできてうれしいです、この概念が普遍的なものであると考える人達にひきつづきお会いすることができて。あなた達は日本で、それを「ユートピア」と言いますね。あの日本の出版物でこの表現を見ましたよ。本当にその通り、生涯教育はユートピアです。

伴…ああ、なるほどユートピアという表現がありましたね。

ラングラン…ユートピアは宗教を表しています。結局、信じるものがある、それぞれ人間は生きていくことができるでしょう。人のパーソナリティを作り上げる全ての要素をマスターできる。それは、あるものから別のものへ変わる、伝統から違うものへ、共産主義から別のものへと変わるといふことではありません。人類は本当の人



間に備える準備がまだできていないので、変わる必要がないので

# 人生は多くを学ぶプロセス

いろんな経験をしてきました。それを彼らはこんな風に尋ねます。あなたは学校へ行つて

す。

伴・1970年にあなたは生涯教育の本を出版されましたね。その後、あなた自身のお考えに何か進展はありましたか、それとも何かこれまでと違った見解が出てきましたか。

ラングラン・そうですね、考えが進展したかという点については、ええと、私がハンブルグで何をしていたのかはお話ししましたね。

生涯教育がどのように具体的に様々なことに関わっていくことができるのか、可能性のある様々な分野に関わっていくことができるのかといった色々なテーマについての問題。こうしてこの本は…それは私の本というわけではなかったのです。それは共同作業でした、この概念について研究した人達で出っ合って統合された考えだったのです。そしてそれはベルガモンで出版され、ハンブルグでも出版されました。実際、こうして生涯教育の概念は発展してきたのです。生涯教育はパーソナリティの様々

な面での発達に役に立つのです。

伴・最近ハンブルクの研究所の所長がダヴェ氏からベランジェ氏に代わりましたね。このご研究所では、同じ生涯教育をテーマにしていても昔の網羅的で理論的アプローチはすっかり影を潜め、かなり実践的で途上国に目を向けた3つのリテラシーを重点に置いています。

ラングラン・私の考えでは、彼らは今までのあり方に従ってはいません。ユネスコ教育研究所の所長のベランジェ氏は私の親しい友人の1人です。彼はまだこの考えをきちんと把握できていないし、把握する必要があります。

伴・ベランジェ氏はあなたととても親しいのですね。

ラングラン・確か、あなたにお話ししましたね。来週、私の人生についての話をまとめて、*Le Metier de Vivre*という題で出版する予定になっていますが、それに彼の書いた序文が載っています。私はこ

の本を書くことで私の人生の軌跡をはっきりさせたいと説明しました。

（略）

伴・その本の中で、あなたが言いたい最も重要なことは何ですか。

ラングラン・何が一番重要か、ですか？ そうですね、この人生80年までで…生きるこの本当の意味だけです。ええ、私の言いたいこと、いやちがう、そうじゃない。私はそれを、*Le Metier de Vivre*と呼びます。つまり、生きる

ことが *Metier* なのです。生きるために学ぶ、愛するために学ぶ、全ての経験してきたこと。だから私がこの本を書き始めた時に、

実際に私が何を書くべきか、ということは特に決めなかった。私はただ述べていった。人々が私に尋ね、ええと、私に質問したのはカナダの人達だったけれど。それでオーケー。私は私の人生で起こったことを述べていこうと決めたのです。それだけです。私は人生で

いる時はどんなでしたか。戦争中はドイツ軍に捕まりましたね。…多くの経験してきたことがありません。私はそれを学んできたのです。私の人生は、本当にたくさんのこととを学んでいくプロセスなのです。私の人生はラーニングプロセスなのです。あなたの人生もラーニングプロセスなのです。

伴・ええ、もちろんです。私は80年代のユネスコ職員時代から今日までずっとあなたから学び続けています。

ラングラン・しかし、その事に気づいている人達もいれば、気づいていない人達もいる。でも結局はラーニングプロセスなのです。人生で何が面白いのか、それは人生がラーニングプロセスだということです。ラーニングプロセスには、時には良くないこと、ただ人騒がせなだけの問題も起きるでしょう、何も意味はなく、方向付けもない、ラーニングプロセスなのです！

新 しい 風 ・ 生 涯 学 習 情 報 誌

# 生涯学習

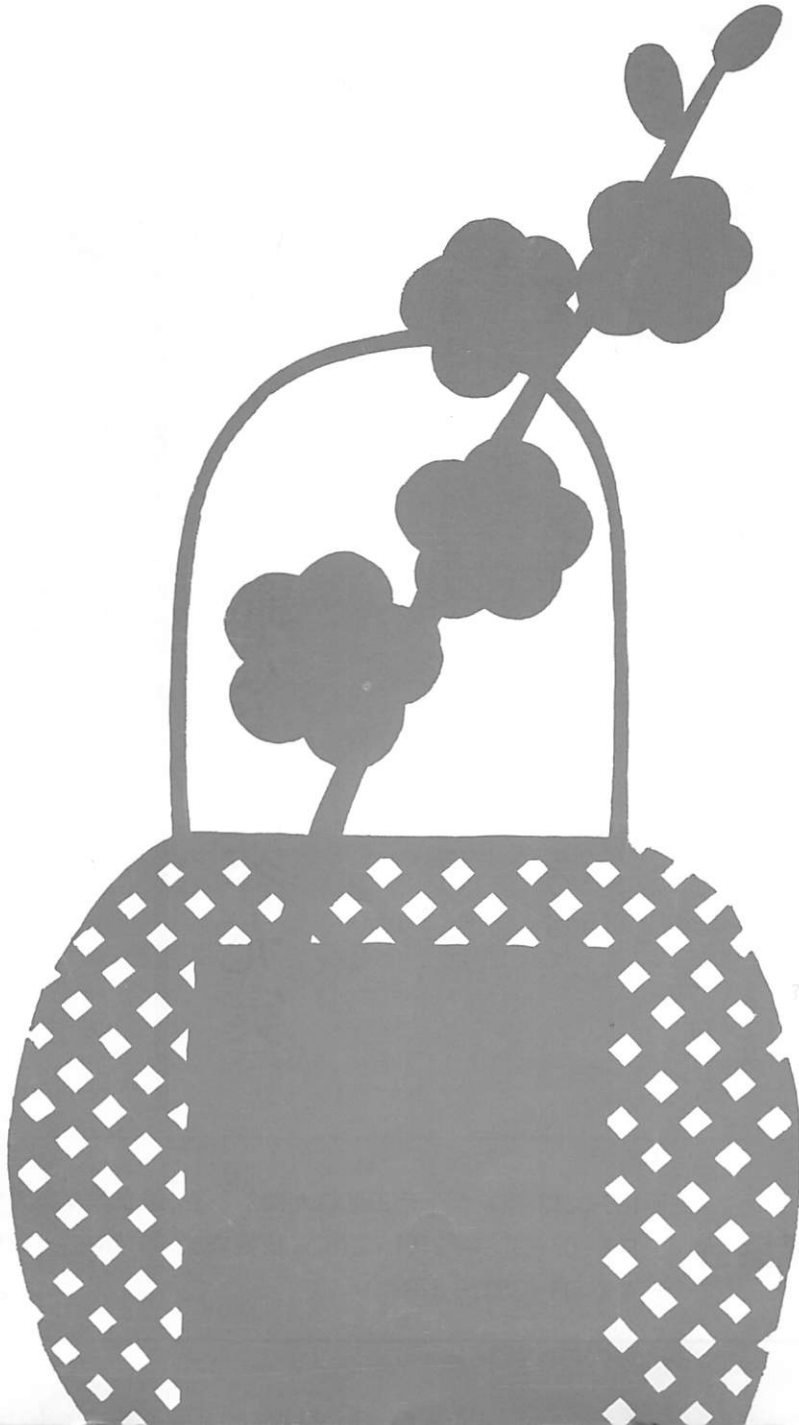


Lifelong Learning

1999

3

No.1188



生涯学習 ■ ラングラン氏との対話  
 ■ 聖徳大学フォーラム  
 高齢者年 ■ 65歳現役社会にむけて